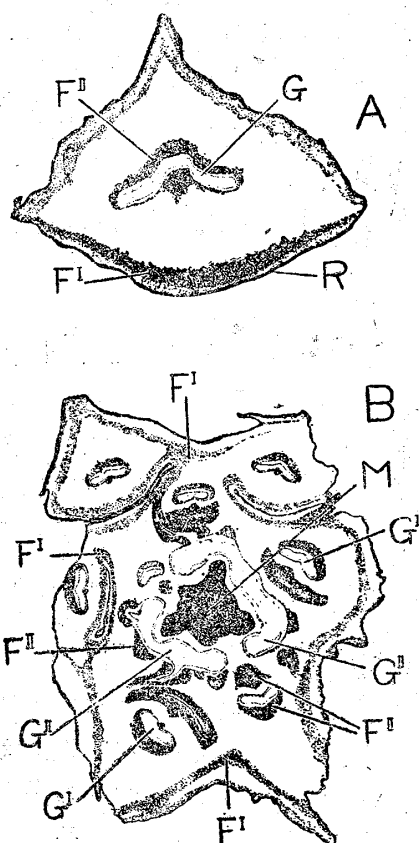


第 1 卷 第 2 號



第3圖 A: キジノヲシダ葉基の中央部
横切面ルーベ圖, B: 同じく根基の横切
面ルーベ圖

ツと同様であつて、これを包圍する維管束鞘及

— 綜 説 —

本 邦 生 薬 の 現 況

木 村 康 一

K. KIMURA : The Present of Drugs in Japan.

生薬關係を専ら取扱う本誌「生薬」の性格上、ここに本邦に於ける生薬の現在の狀況を一應整理して紹介し、その將來に於ける見通しも考へて見たい。我國生薬の成立ちを考へるのに、その始末、いうまでもなく他のいずれの民族に於てのものとも同じ様に、天産物を色々工夫して用いたであらう。併しそれ等のものについては、僅に傳説によるだけで、確な事は分らない。唯、大陸との交通により他の文物と共に朝鮮次いで中國更に又印度方面の醫薬が我國に傳えられ、近代新に西洋醫學の紹介と共に採入れられた西洋の薬（化學薬のみならず數多くの生薬を含む）及びその使方が我國に傳わり廣まる

び基本組織も又同様である。内容物も同様である。

根莖の横切面（第3圖：B）をルーベ及顯微鏡で檢するに中央の髓（第3圖：B・M）は黒褐色の不整三角形を呈し、その周圍に輪列する大維管束（第3圖：B・G^{II}）の數は3~5箇である。その他は何れもヤマソテツと相違點がない。

オホキジノヲ *Plagiogyria eruphlebia*
M_{ETT}

材料 牛尾山（山城）・赤目（伊賀）・湯ヶ島
淨蓮瀧（伊豆）で採取したものを實驗材料に使用した。

形質 葉基・根莖共に總てキジノヲシダと同様で區別がない。

構造 葉基の表皮の外壁が木化・胞化していない點以外は總てギジノヲシダと同様である。根莖も又同様である。

圖版略字解 End 内皮, Ep 表皮, F^I・F^{II} 厚表纖維組織, G 維管束 (G^I 小維管束, G^{II} 大維管束), M 髓, P 柔組織, Pc 内鞘, R 皮部, S 篩管, Sta 澱粉粒, Ta タンニン, Tr 假導管。

昭和21年9月20日

（京大藥學科・生薬教室）

生

藥

従つて、一般の人達の中には最近の新しい藥の宣傳の華々しさに氣を取られて、生藥を全く前世紀の遺物の様に忘れ去ろうとする者も少くない。

實際昔のままに野草を或は生藥をそのまま煎したり等して用いる原始的な用法は、止むを得ない時の他は、徒に使用者の時間と手間をわすらわし、且つ又それでは服み難い、又携帯や保存にも都合が悪いという様な色々な不便があり、藥の道に携わる者としてはそんな不便を世の人に強いておく事は責を果さぬ事になる。従つて生藥そのものを服用者に直接強いる事は、遅かれ早かれ導いて行くのが我々の仕事である。と云つても、藥界から生藥が姿を消すのではない。製藥或は製劑の原料として生藥の持つ使命は、化學的合成藥や醱酵製劑、組菌製劑或は血清、ワクチン等と相並んで益々増すものとする。殊に只今の様に合成品の原料や資料の行きつまつている時には生藥の使命は更に大きい。

唯それには、輸入生藥はさておき、邦産のものを持つて行き方に大きな努力が拂われなければならない。生藥も從來多くは取引上の値打を主にし、利益のあるものが重んぜられ取扱われたものと考えられるが、

今後は國民の保健衛生を主にし、一方又輸出商品として値打をも考え、國家、研究者、技術者、取引者、生産者等總てが力

を合せ、合理的な生藥或は製藥製劑原料の確保生産を考えて努めなければならない。

世界の文化の進んだ國々に於ては、今や擧つて藥の人工的の生産に心を注ぎ、つき進んで居るが、それ等の國々に於ても上に述べた様な理由だけでも、生藥の重要性は益々根強いものとなつて居る。特に中華民國や我國の様に、生藥そのものとしてではあるが、その用法が過去に於て相當組織的に進み且つ一般化した國に於ては、一般の生藥利用に就いての習わしは根強いものであり、且つそれが國民の保險衛生に爲になる所は甚だ大きいのである。

それは從來の漢方的な使い方で、又は民間療法的に漢法を利用する醫家により又は家庭に於て用いられて居り、殆ど全國的なものであるが、消費される生藥の量からいえば大きくはない。その消費される量は藥劑師の調劑用も含んで全體の3~4%に過ぎない。併しその常用の約100種の生藥の中、僅に大黃、麻黃、甘草、桂皮、求等の數種が缺けても、その治療上には殆ど致命的な差障りを來すのである。しかもそれ等は中國からの輸入品に多いのである。其他の大部分は製藥製劑の原料として費される。その中、局方製劑原料向と新藥新製劑原料向とが合せて30~35%、家庭藥原料向が60~65%で、生藥が家庭藥として一般民衆に親しまれるもの原料にまわされる量はあなどれない。(第一表)その他生産に餘裕があり、(例えば黃連)又は國內の需要よりも中華民國等に需要の多いもの(例えば枳實、枳殼の名で扱われる代々、夏密柑、密柑等の柑橘類の未熟果實)約20品が輸出される。(第二表)

以上の國內で消費される生藥の中、國產のものは量にして50~60%、金額にして35~40%で、その餘は輸入に悖つものである。

第 一 表

國產生藥	—	生藥そのものとして使われるもの	—	量(3—4%)	—	和漢藥專門店
金額(35—40%)						藥局調劑
量(50—60%)						醫師調劑
輸入生藥						病院及會社、工場等の大口需要
金額(60—65%)	—	製藥製劑原料	—	(30—35%)	—	局方製藥製劑
量(40—50%)						新藥新製劑
商品としてあらわれない民間での消費				(60—65%)	—	家庭藥製造

以上の數字は大體戰爭中の統制扱された約100品目の生藥についてであるが、これで凡そ我國に於ける生藥の消費の様子はうかがわれる。

此の中には麻黃のよおに、その大部分がエフェドリン又はその誘導體の製造原料に費されるものもある。又、甘草は生藥中輸入量の最も多く、殆ど家庭藥向に消費されるものであるが、しかもその量は醬油や佃煮等の甘味料に消費する量に比べれば $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ である。

生藥の統制中、日本生藥統制會社に統制を指定されて居たもの以外に大きなものは、人參、

第 1 卷 第 2 號

五倍子、除蟲菊、薄荷等で、別に各々単一の統制機關があり、農林省關係の扱いになつて居た。又、キナ皮、吐根等も別に扱われた。又、カレー粉の主原料、澤庵漬の色付として費されて居た鬱金（誤つて姜黄ともゆう）も肝臓藥クルクロンの原料として製藥界に乗り出して來た。

是等の生藥は大部分は重要生藥として我が藥局方に收められ、又その餘の大部分は準藥局方に載せられている。終戦後、輸入が全く閉ざされた爲めに、輸入生藥を使用して居たものにはそれが大きいたで、製藥事業にはいうまでもないが、家庭の保健にもひびきが大きい。そこで輸入して居た生藥のうち國産で代用できるものがあれば、それに代えようとつとめ、我國で手に入り得るものでも、量や値段の點で輸入品に頼つて居たものは、何とかして之を自給自足しようとつとめる様になつた。

そこで、一方に於て、生藥の輸入が再び開かれる様に骨をおると共に、他方に於ては藥用植物の栽培の計畫が一段とうながされるに至つた。

藥用植物の栽培は從來も厚生省關係で大いに奨励して居るが、戦争以來農家が蔬菜等利潤の大きいものの栽培に走り、低い公定價にしばられて居る藥用植物の栽培をうとんじ、その成績は思わしくない。野生品の採集も、戦時中は勤勞奉仕等の力も興つてどうかあつたが、戦後は勞力が専ら利潤の多い方へ使われるので、それも思う様に行かない。そこで輸入品ばかりでなく、國産品に於ても生藥は苦しい状態にある。

我國の藥用植物栽培の過去の成績はかなりす

ぐれたものである。明治19年和歌山縣下の試植に始まつたダルマシヤ原産の除蟲菊の栽培は今や世界有數なものになつた。中華民國原産の川芎や當歸も、今日我國の栽培品が民國へ輸出され、本場の四川省を驚かせた。

昨今は食用作物とにらみあわせ、藥用作物の栽培に關する各府縣への割り當てが大體定められ、栽培が奨励されて居るが、今後は他のあらゆる有用作物と共に、藥用作物栽培も經濟的にも技術的にも更に一段とつとつこんだ計畫と指導を強め、人口の多い割に小さい國土を最も有機的に利用し、平和國家として立ち直ろうとする我國經濟に大いに貢献したいものである。

要するに、今の所、外國生藥はまだ輸入が許されぬ爲め行きすまり、國產生藥は食用作物におされて行きすまつて居るが、生藥の需要は増しこそすれ、減るとは考えられない。それには、どうしても輸入にまたなければならぬものは何とかして早く輸入さしてもらうように努力する。一方、國內で生産して來たものは、少くも國內需要量は生産を確保し、我國で栽培できるものでありながら生産費が輸入品より高くつくため國內の栽培が行われなかつたものも何とかして栽培に導き、自給自足をできるだけはげむ。そして自給自足して餘分を生産する力をたくわえて、製藥・製劑と共に生藥も大いに輸出し、外貨を得る役目をも受持つ、生藥の生産も、過去の原始的な殻を出来るだけ早くぬいで、進んだ現代的な企業計畫にうつし、單に人々の保健衛生に寄與するばかりでなく、我國の經濟復興に一役買わねばならぬ。生藥の生産については、又稿を改めて論ずるつもりである。

昭和22年11月（京都大學藥學科生藥學教室）

第 2 表

品 名	朝 鮮			中 華 民 國			備 考
	數 量	單 價	金 額	數 量	單 價	金 額	
一 號 枳 殼	3,000 匁	100匁 1,784.78	53,543.40	3,000 匁	1,784.78	53,543.40	
二 號 枳 殼	6,000 "	1,149.25	68,955.00	6,000 "	1,149.25	68,955.00	
三 號 枳 殼	9,000 "	983.52	88,516.80	9,000 "	983.52	88,516.80	
久 丸	3,000 "	864.78	25,943.40	60,000 "	894.78	518,868.00	
莫 菜 黃	6,000 "	1,747.67	104,860.20	6,000 "	1,747.67	104,860.20	
芍 藥	60,000 "	1,717.77	1,030,662.00	42,000 "	1,717.77	721,463.40	

生 藥

川	芎	240,000 //	1,010.06	2,424,144.00	300,000 //	1,010.06	3,030,018.00
貝	母	2,400 //	2,467.18	59,212.32	0 //	2,467.18	0
牡	丹	18,000 //	3,156.08	568,094.00	0 //	3,156.08	0
黃	皮	3,600 //	13,804.78	496,972.08	3,600 //	13,804.78	496,972.08
大	連	90,000 //	1,647.20	0	0 //	1,647.20	0
深	當	0 //	1,035.38	931,842.00	90,000 //	1,035.38	931,842.00
外	歸	3,000 //	1,221.27	36,638.10	90,000 //	1,221.27	1,099,143.00
厚	朴	0 //	3,011.17	0	0 //	3,011.17	0
生	薑	1,800 //	1,018.88	18,339.84	1,800 //	1,018.88	18,339.84
楠	皮	150,000 //	651.60	877,400.00	150,000 //	651.60	877,400.00
陳	皮	6,000 //	1,384.92	83,095.20	3,000 //	1,384.92	41,547.60
烏	頭	1,800 //	1,192.27	21,460.86	12,000 //	1,192.27	143,072.40
眞	木	600 //	1,750.00	1,050,000.00	600 //	1,750.00	1,050,000.00
サ	フ	900 //	1,699.00	15,291.00	900 //	1,699.00	15,291.00
山	椒	605,100 //		7,954,970.20	777,900 //		9,259,832.72
合	計						
總	合	計	1,383,000 匁	17,214,802.92			

本表は日本生藥統制會社が昭和21年8月作製，G. H. Q に差したもので，生藥の輸出が許されれば，昭和22年度にはこれだけ出せるという豫想を記す。

第 3 表

品	目	輸 入 先	數 量	單價CIF 100k	金 額	内醫藥品向
黃	耆	北 支	500K	751.57	3,757.85	
黃	芩	〃	5,000	688.20	34,410.00	
黃	柏	〃	450,000	629.48	2,832,660.00	300,000K
甘	皮	〃	440,000	1,336.67	5,881,348.00	
桔	梗	〃	82,000	2,071.28	1,698,449.60	32,000
牛	膝	〃	1,000	1,986.86	19,868.60	
麻	黃	〃	265,000	872.08	2,311,012.00	200,000
藿	香	中 南 支	4,500	1,109.95	49,947.75	
香	附	〃	4,000	751.55	30,062.00	
紅	花	北 支・中 南 支	5,000	4,378.43	218,921.50	
胡	連	中 南 支	500	1,543.37	7,716.85	
牛	黃	中 南 支・中 南 支	200	1K 16,091.70	3,218,340.00	
山	歸	中 南 支	2,000	3,380.43	67,608.60	
山	梔	〃	1,000	360.92	3,609.20	
山	子	〃	1,500	593.18	8,897.70	
使	君	〃	500	955.79	4,778.95	
麝	香	〃	200	1K 20,545.40	4,109,080.00	
絹	砂	〃	5,000	3,127.03	156,351.50	
セ	ソ	〃	1,000	1K 1,578.32	157,832.00	
小	苗	〃	15,600	1,198.18	186,916.08	600
澤	香	〃	1,000	1,627.85	16,278.50	
丁	香	中 南 支 海峽殖民地	25,000	3,753.57	938,392.50	10,000
茯	苓	中 南 支	30,000	461.05	138,495.00	
益	智	〃	2,500	1,860.10	46,502.50	
熊	膽	〃	200	1K 8,043.15	1,608,630.00	
芦	石	〃	200	2,963.78	5,927.56	
阿	仙	海 峽 殖 民 地	60,000	1,231.40	738,840.00	

第 1 卷 第 2 號

檳榔子	海峽殖民地	1,660	878.18	14,577.78	160
桂皮	佛印	80,000	964.61	771,688.00	
沈香	〃	1,000	13,274.50	132,745.00	60
ホミカ	〃	60	254.07	152.44	300,000
海人草	臺灣・朝鮮	340,000	1,660.00	5,644,000.00	20,000
大風子	シヤム	23,000	203.73	46,857.90	15,000
ウワウルシ葉	印度	15,000	5,552.38	832,857.00	10,000
小豆蔻	〃	10,000	1K 35.14	351,400.00	
合 計		1,873,220		32,288,912.36	

第 4 表

昭和2年から11年に至る10年間の生薬の輸入量及額

	量(キログラム)	額(圓)
1927	5,723.000	5,906.00
1928	5,312.000	5,492.00
1929	5,932.000	6,258.00
1930	5,435.000	6,929.00
1931	5,496.000	10,755.00
1932	6,500.000	12,187.00
1933	6,725.000	12,878.00
1934	6,325.000	15,021.00
1935	7,123.000	20,900.00
1936	5,813.000	15,200.00

本表の數字は記録にあらわれた最低の數字であつて、且又香油、脂肪油等も入つてあらず、實際の數字はもつと大きい。

第 5 表

品 名	數 量	品 名	數 量
甘草	809,278 K	延胡索	10,000斤
キリン血	10,160	ゲンチヤナ根	8,333

小茴香	60,793	牛黃	275
紅花	50,460	牛膝	14,856
香附子	15,000	花沒藥	10,000
桂皮	29,850	麝香	432
クベバ實	13,408	沈香	1,937
麻黃	2,084,748	藿香	2,011
唐木香	13,492	蘆薈	16,613
肉豆蔻	38,480	蘆眼石	500
乳香	4,986	山歸來	2,582
遠志	9,593	山查子	5,000
黃耆	29,598	柴胡	34,804
黃芩	34,972	使君子	3,600
連翹	5,000	小豆蔻	1,969
阿仙藥	120,074	縮砂	9,918
白芷	10,000	水犀角	350
檳榔子	27,224	センナ葉	101,708
茯苓	50,000	センソ	312
丁香	144,778	熊膽	26
大茴香	77,970	益智	19,741
大黃(唐)	1,381		
芋大黃	166,619	合 計	4,052,831斤

藥用植物栽培の現状と其の將來に就て

橋 本 義 一

Y. HASHIMOTO : The Present and the Future of the Cultivation
of our Medicinal Plants.

第一節 藥用植物栽培の現状

戦争終結既に一年半、茲に日本の製薬業界も國の内外より起因する客觀的諸條件に一部轉換を餘儀なくされるに到つた事は衆知の事であらう。其の結果はキグスリ、ナマヤク等と稱ばれ一般的には極めて冷遇視されていた生薬が時の脚光を浴びて各地に於ける生薬に関する懇談會

或は生薬増産協議會等となつて表れ頻りに開催されつつあるのは正に生薬價値の再確認時代とでも謂うべきであらうか、ともあれ此の熾んな生薬熱が如何に具體化されつつあるか、且つ亦現在の實際耕作反別は如何を別表に依つて述べたいと思う。